



Title	葬式にあらわれたムラの社会関係 : 滋賀県甲賀町櫛野の一事例
Author(s)	リムスリトン, マリー
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1986, 20, p. 3-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56551">https://hdl.handle.net/11094/56551</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 葬式にあらわれたムラの社会関係

——滋賀県甲賀町櫟野の一事例——

マリー・リムスリトン

## はじめに

ムラはさまざまな文化的、社会的現象の生起する場と考えられる<sup>(1)</sup>。筆者はムラをこのような場として把握するために、葬式という具体的な事例を通じてみられた社会関係について考察し、そして、親族・同族・近隣・檀家という四つの社会関係とかかわる人々が葬式において、様々な役割を果し、協同的活動を行なっていることを明らかにしてみたい。またこれと合わせて、葬式にみられたムラの協同関係はどのような条件によってもたらされるのかという点をも考えてみたい。

筆者は、滋賀県甲賀町<sup>いちの</sup>櫟野におけるフィールド・ワークを通じて以下のデータを集めた。

## 1 調査地の概観

甲賀町は滋賀県の東南端、野洲川支流の<sup>やす</sup>杣川上流域に位置している。現在、本町には21の大字がある。本稿で紹介する櫟野は、杣川の支流の櫟野川流域に位置する農村である。櫟野の人口は昭和60年（1985）6月現在、93世帯、445人で、男子225人、女子223人で、面積は6.38平方キロメートルである。

ところで、櫟野は三つの組（ムラの人はいずれを小組合と呼ぶこともある）すなわち、東部に上の組、中央部に中の組、西部に下の組に分けられてい

る。これらの三つの組はさらに、上の組は四つ、中の組は四つ、下の組は三つの隣保組に区分されている。櫟野の行政組織は、区長1名、協議委員会12名、小組合長3名、隣保組長11名から構成されている。

櫟野には櫟野寺と阿弥陀寺<sup>あみだでら</sup>の二つの寺院がある。櫟野寺は天台宗の寺院で櫟野の西部にある。阿弥陀寺は浄土宗で、櫟野の中央部にあり、櫟野の人々の檀家寺である。

## 2 ムラと葬式

——徳田平兵衛氏の葬式を事例として——

「死」は人間として、避けることができない。この段階に応じるのは、葬式という人生最終の儀礼である。個人にとって、避けることのできない「死」は単に生命の終焉にとどまらず、一つの社会的現象でもある。

本節では、葬式の準備をはじめ、本葬、死後の供養行事というそれぞれのプロセスおよび死とかかわる年中行事としての盆行事などを記述する。具体的な一つの事例として、筆者の実際に見た徳田平兵衛氏の葬式をとりあげてみたい。<sup>(2)</sup>

葬式は昭和60年（1985）5月3日に、浄土宗の形式で下の組、第11隣保組にある自宅で行なわれた。櫟野では現在でも土葬であるので、徳田平兵衛氏は中の組にある阿弥陀寺内の墓地<sup>(3)</sup>（サンマイ）に埋葬された。葬儀委員長は第11隣保組長の田中喜郎氏であった。

5月1日の晩、徳田平兵衛氏がなくなった。翌日の朝、親戚・第11隣保組長・寺院への死の知らせが行なわれた。下の組の人たち、カブ（後述）への連絡は第11隣保組長が行なった。一方、医師による死亡診断書の交付、埋葬許可書をもらうための町役場での死亡登録などの諸手続きがなされた。それから葬式の準備にとりかかった。

近親者や隣保組の人々および隣保組長が葬家に集まり、いろいろな準備をした。遺体は家の奥の間に安置された。そして、遺体は北枕にした。枕

元に枕団子とろうそくを膳に載せて供えた。

この日の午前中、阿弥陀寺の住職に枕経を唱えてもらった。それから近親者たち、隣保組長、隣保組の人々が葬式の役割を決めるための会を開いた。

男性は葬家の中で葬具作りの仕事をした。一方、墓地では4、5人が墓穴掘りを行なった。このとき、女性は来客の接待・食事の準備などの役を果していた。

午後、棺が運ばれてくると、湯灌がはじまった。湯灌は近親者によって、遺体の安置されている奥の間で行なわれた。湯灌が終わると、遺体を棺に納めた。それから、手伝いにきた者たちにお礼としての食事を出した。

午後8時30分ごろ、お通夜が行なわれた。近親者・組の人・組長が遺体を囲んで過ごした。このとき、櫟野寺の住職および下の組の御詠歌会の人々が御詠歌を唱えた。これが済んだ後、近親者は交代に遺体のそばで一晩過ごした。

葬式は翌日5月3日に行なわれた。手伝いにきた者はカブおよび組の人である。午前中いろいろな準備がなされた。

香典帳を調べると、香典帳に記載されている人々は次の四つの種類に分けられている。

- 1) 僧侶および取引業者の部（寺院・商店・櫟野老人クラブなど）
- 2) 在所の部（11隣保組の人々・カブの人々）
- 3) 櫟野内一般の部
- 4) 親族の部

僧侶および取引業者の部は御仏前（2千円～1万円）を供えた。在所の部の人々は皆同じように、米や御仏前（5千円）や食物を供えた。字内一般の人々は御仏前（千円）を供えた。親族の部の人々は御仏前（3千円～

5万円）と供え物を供えた。

出棺の前に死者と離別のための共同供養が行なわれた。出棺は午後2時ごろにはじまった。親族たちは祭壇の左側に死者と血のつながりの濃い順に従って、着席した。住職たちのお経が終了した後、親族たちは着席の順に従って、祭壇の前で焼香を行なった。次に、親族たちは祭壇から棺をおろした。出棺のとき、棺は縁側から外に出された。葬列については役割があり、それに従って、参列者はそれぞれの役を果していた。

墓標	松本 久雄
生花	木村 充
	北相模友弘
	沢田 淳子
位牌	木村 正利
御膳	徳田よしえ
幡	徳田 吉弘
	徳田 康雄
	大原 伴五
	大原 喜郎
燈灯	鶉飼 助一
	西村 喜郎
天蓋	北相模 勇
輿（前）	沢田 竜司
（後）	徳田 憲夫

阿弥陀寺におけるサンマイと呼ばれる埋葬場に棺が運ばれた。棺を墓穴に頭が北方を向くように埋めた。親族たちは死者と血のつながりが濃い順番に土を棺にかけた。それから、家に帰った。最後に残ったカブの人・組

の人が土をかぶせた。

この晩、百万遍念仏が行なわれた。親族たち、カブの人々は円座して、百万遍念珠をくり、一顆をくるとに、念仏を唱えて、その総和を持って、百万回にするという。

本葬の翌日の朝（5月4日）、近親者は「ハイソウ参り」を行なった。「ハイソウ参り」とは死を確認するため、墓参りをするものである。近親者の中で最も死者と血のつながりの濃いと考えられている長男が、死者の名前を大きく叫んで、鍬で墓土をたたいた。このとき、返事がなければ、死が確認される。

葬儀の後、親族たちは四十九日の忌明けまで、初<sup>しよ</sup>七<sup>な</sup>日・二<sup>ふた</sup>七<sup>な</sup>日・三<sup>み</sup>七<sup>な</sup>日・四<sup>よ</sup>七<sup>な</sup>日・五<sup>ご</sup>七<sup>な</sup>日・六<sup>む</sup>七<sup>な</sup>日・七<sup>しち</sup>七<sup>な</sup>日の供養を行なった。

四十九日で、死後七日ごとに行なわれる供養は終了すると考えられている。四十九日の供養には親族・カブ・組の人・組長が阿弥陀寺で念仏を唱えてもらった後、墓参りをした。

7月14日に百ケ日の供養が近親者によって阿弥陀寺で行なわれた。百ケ日の後、死者の供養行事は一年忌以後、三年・七年・十三年・十七年・二十三年・二十七年・三十三年に行なわれる。

8月には初盆の行事が行なわれた。1985年櫟野では初盆の家が5戸あった。8月1日に阿弥陀寺で施餓鬼が行なわれた。近親者がサンマイに参り、午後、寺院で住職に塔婆<sup>しんぼとけ</sup>に新仏の戒名を書いてもらい、お経を唱えてもらう。

8月13日に、初盆の家では、近親者が初盆の棚を準備した。その晩、第11隣保組の各家の代表と隣保組長がお参りにきた。縁側には盆提灯がかけられた。新仏を迎えた。

14日に、櫟野の各戸の代表が初盆の家に参った。ただし、初盆同志はお互いにお参りをしない。

15日に、初盆の家でも、祖先を送る行事をするが、新仏を送る行事は翌

日の16日に行なわれる。また、この日には他所の親戚がお参りにきた。

16日には初盆の家5戸が死亡の年月日の順に阿弥陀寺で住職にお経を唱えてもらった。このとき、盆棚にまつられた塔婆・しきみの花・蓮の花などをサンマイに持って行った。そして、塔婆は焼いてもらい、しきみの花・蓮の花はそのままサンマイに置いた。

### 3 葬式にあらわれたムラの社会関係

葬送儀礼はムラの一つの事件として、ムラ全体が参加する儀礼であるため、ムラ社会の人々のつきあいおよび社会関係がよくあらわれる大切な機会の一つだと思われる。

1985年5月3日に、櫟野・下の組・第11隣保組で行なわれた徳田平兵衛氏の葬式は、葬儀屋にゆだねることはほとんどなく、多くのムラ人の協力によって運営されている。

葬式前後の諸過程および人々の役割は、以下のとおりである。(図1に示した)

#### 1) 5月2日、葬式の準備の諸過程

死の知らせ	(4) 親族・隣保組長
北 枕	親 族
枕 経	寺 院
祭壇の準備	隣保組の人々
墓穴掘り	〃
葬具作り	〃
湯灌・納棺	親 族
料理の準備	親族(女性)
来客の接待	〃
お通夜	寺院・御詠歌会・親族・組長・組の人々

図1 葬式における諸過程とそれに対しての人々の役割

年月日	過 程	内 容	役 割 を 果 す 者
1985.5.2	葬式の準備	死の知らせ 北 枕 枕 経 祭壇の準備、墓穴掘り、葬具作り 湯灌、納棺 料理の準備、来客の接待 お通夜	親族、第11隣保組長 親 族 寺 院 隣保組の人々  親 族 親族(女性) 寺院、御詠歌会、親族、組長、組の人々
5.3	本 葬	香典の受け付け 料理の準備 出棺の前の行事 野辺送り 埋 葬 百万遍念仏	親族、組の人々 親族、カブ、組の人(女性) 寺院、親族、カブ、組の人 親族、カブ 親族、カブ、組の人 親族、カブ
5.4	死の確認	「ハイソウ参り」	親 族
	死後の供 養	初七日～七七日まで 四十九日の忌明け 百ヶ日 年 忌	親族、寺院 親族、カブ、組長、組の人 親 族 親族、カブ
7.13～16	初 盆	盆棚の準備 迎える行事 送る行事 料理、来客の接待	親 族

2) 5月3日、本葬の諸過程

香典の受付	親族・組の人
料理の準備	親族・カブ・組の人(女性)
出棺の前の行事	寺院・親族・カブ・組の人
野辺送り	親族・カブ
埋 葬	親族・カブ・組の人
百万遍念仏	親族・カブ



## 3) 5月4日、死の確認

「ハイソウ参り」 親 族

## 4) 供養行事

初七日～七七日 親族・寺院

四十九日の忌明け 親族・カブ・組長・組の人

百ケ日 親 族

年 忌 親族・カブ

その他、年中行事としての盆行事のとき、8月13日から16日までの諸行事は親族たちによって行なわれた。

以上の葬式の前後の諸過程と人々の役割および香典帳の記載から見て、葬式において、最も主要な役割を果たしたのは親族の部である。労力を提供して協力したのはカブと組の人々であるが、相互協力に大きく活躍したのは組の人である。そして、第11隣保組長が葬儀委員長になって、葬式の全体の進行を総括した。これらの葬式における役割から、親族・同族(カブ)・近隣(組の人)・檀家(寺院)というムラにおける四つの関係のあり方があらわれてくる。そこで、葬式を契機にしてあらわれた親族・同族・近隣・檀家という四種の社会関係がそれぞれどのように機能しているのかを考察することにした。

## 1 親 族 関 係

徳田平兵衛氏の葬式に際して、葬列の役割の内容は前節で記述しておいたように、(カブを除いて)すべて故人と親族関係のある者によって担われていた。その役割分担と故人との関係は次のようである。

墓標	松本 久雄	マゴのムコ	DADAHU <sup>(6)</sup>
生花	木村 充	ヒマゴ	SoDASO
	北相模友弘	ヒマゴ	DASoSo

葬式にあらわれたムラの社会関係



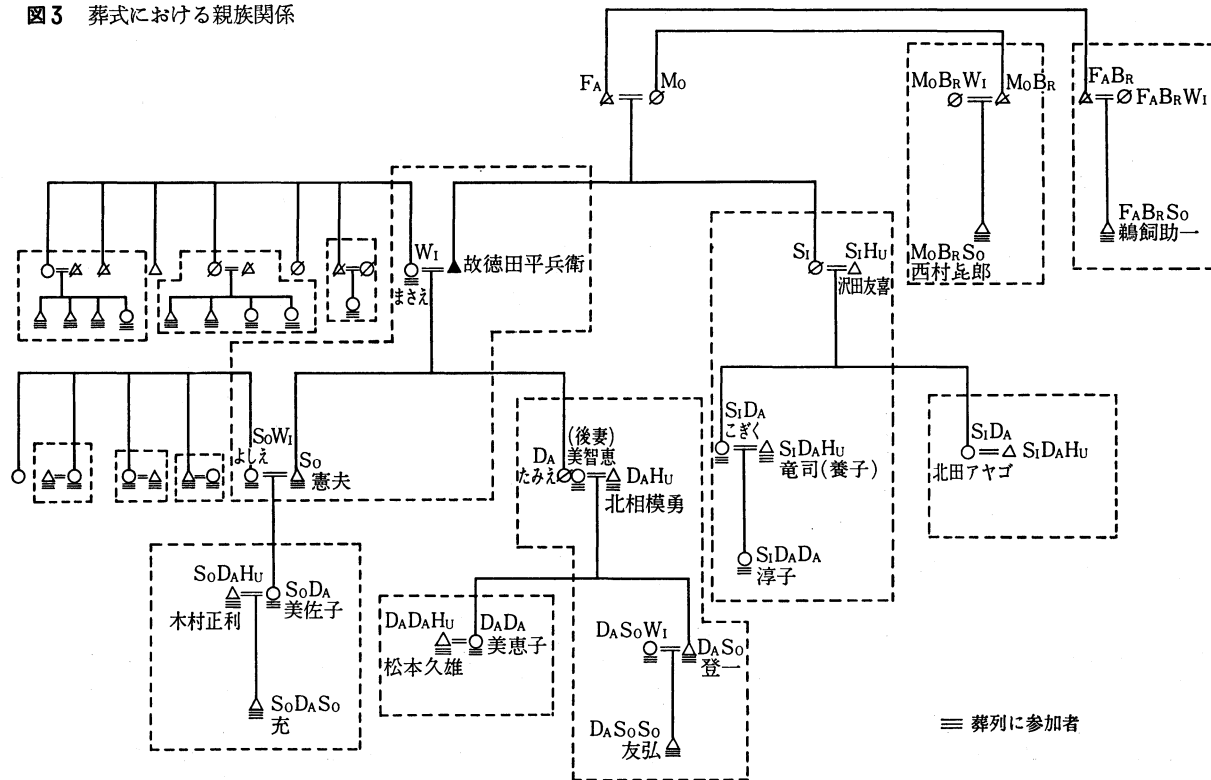
	沢田 淳子	メイのムスメ	SiDADA
位牌	木村 正利	マゴのムコ	SoDAHu
御膳	徳田よしえ	ヨメ	SoWi
幡	徳田 吉弘	カブ	
	徳田 康雄	カブ	
	大原 伴五	カブ	
	大原 喜郎	カブ	
燈灯	鶯飼 助一	チチカタイトコ	FABrSO
	西村 喜郎	ハハカタイトコ	MOBrSO
天蓋	北相 模勇	ムスメのムコ	DAHu
輿(前)	沢田 竜司	オイ(ヨウシ)	
(後)	徳田 憲夫	チョウナン	So

(葬列における役割分担と故人との関係は図2に示した)

親族の部には、葬列で役割を果たす人たちだけではなく、役割を割り当てられない親族たちも含まれている。これらの親族の部は徳田平兵衛氏と図3のような親族関係を持っている。

親族関係は出生・婚姻・養子慣行を契機として、成立する個人関係であることがわかる。出生あるいは血族の契機から見ると、徳田平兵衛氏にとって、徳田憲夫・北相模たみえ(死亡)・木村美佐子・木村充・松本美恵子・北相模登一・北相模友弘は直系親族である。鶯飼助一・西村喜郎は傍系親族である。一方、徳田まさえのキョウダイシマイの家族・徳田よしえのキョウダイシマイの家族・木村正利・北相模勇・松本久雄・沢田友喜は婚姻を契機として、徳田平兵衛氏と姻族関係の親族となっている。また、この中に徳田平兵衛氏のアネのムスメのムコヨウシである沢田竜司が養子の慣行によって、親族のステータスを持っている。なお、家の存続が重要視されるため、養子慣行は子供のない場合か、あるいは子供があってもム

図3 葬式における親族関係



スメばかりで男の子がいない場合に行なわれる（ムコヨウシ）。

以上のように、櫛野において、「親族」という言葉は血族も姻族も含めて使われている。また、「親族」とは生物学的に血のつながりのある者に限らない。すなわち、養子という非血縁者の場合も親族の成員になるとみなされている。

さらに、親族関係の中に「濃い親戚」と呼ばれる範囲がある。「濃い親戚」とはコドモ・キョウダイシマイ・ヨメ・ムコ・マゴ・オイ・メイの関係である。ここで注意しなければならないのは、イトコおよびツマカタ・ヨメカタの親族は「濃い親戚」だとみなされていないことである。

なお、香典帳を調べると、沢田家・北相模家・木村家の三家は5万円の香典（御仏前）持参し、最も高額であった。松本家・北田家は3万円を持参し、二番目に高額であった。他の親族たちの場合は3千円から3万円までの金額を持参した。したがって、香典の金額は親族関係の濃さを示す指標といってよい。その結果、徳田家に対して、沢田家・北相模家・木村家・北田家・松本家が「濃い親戚」と考えられていることがわかる。この5家の中で、沢田家・北相模家・木村家の方が、北田家・松本家よりも濃さのレベルが高い。

## 2 同族関係

親族以外に、葬式において、特に本葬の日労力を提供したり、葬列における幡を持つ役割を果たしたり、さらに四十九日の忌明けの行事にも参加したりしたのは、カブという同族集団である。

櫛野には、現在16のカブがある。櫛野の93世帯はすべてそれぞれのカブに属している。櫛野においては、カブは基本的には姓を同じくする家々の集団と考えられるが、図4に示すようにいくつかの例外もみられる。例えば、奥村姓の家は同姓でありながら、二つの奥村カブに分かれている。また、九里カブ・東カブ・大原カブは異なる姓の家を含めた家々の集団であ

図4 櫟野におけるカブ

カブ	家数	成 員			居 住 (組)
		同姓	異姓	家 の 代 表	
大 原	14		○	大原（一吉、伴五、九二、憲一、宏、金一、明夫、喜治、宗一郎、甚内、喜郎） 徳田（康雄、一男、憲夫）	中、下
奥村(2)	9	○		奥村（実、義和、喜久治、寛一、昇二、夫一、和宏、俊雄、蕃）	上
島 岡	9	○		島岡（正吉、良三、仁市、静江、喜三郎、信一、哲郎、政雄、又一）	中、下
山 本	8	○		山本（茂、敏男、春雄、佳一郎、篤之、進、甚七郎、義一）	中、下
九 里	6		○	九里（忠治、茂七、昇、正光、武雄） 岡島（正司）	上
井 元	5	○		井元（善吾、章、弘一、三郎、善次郎）	中、下
東	5		○	東（半十郎、清一、実、由喜子） 谷口（吉雄）	中
田 中	5	○		田中（みさお、成子、修司、勇、久作）	下
雲	5	○		雲（佳信、吉雄、貞雄、和三）	上、中
奥村(1)	4	○		奥村（忠雄、寛、宗雄、博）	上
西野尾	4	○		西野尾（末吉、勇、良吉、次男）	上
田 口	4	○		田口（文七郎、昇平、亀之助、貞藏）	下
松 本	3	○		松本（八郎、直人、嘉一郎）	下
山 下	2	○		山下（英一、勝二）	下
三 浦	2	○		三浦（皎英、唯子）	下
寄 せ	8		○	上井 実 糸田 喜郎 佐藤 玄定 田嶋 淳 田嶋 修 林 千秋 林 邦弘 細井富次郎	中 上 中 上 上 下 下 下

る。さらに、櫟野には寄せカブと呼ばれるカブがある。この寄せカブは図4に示すとおり、別々の姓を持つ家々が集まり、一つのカブを構成している。

カブの構成単位は家である。個人はあくまでも家を通してカブに属する。櫟野の家というものを見ると、家の継承相続は必ずしも血縁につながるものでなくてもよいのであって、(ムコ)養子、使用人などが家をつぐことも櫟野において行なわれている。このように、家の継承は血縁関係を絶対条件としていない。したがって、家の集合体として成立しているカブにも非血縁的な要素が存在しているといえる。

カブうちの家と家との関係は本支関係により結ばれている。本支関係とは、二つ以上の家の関係つまり本家分家の間の関係である。しかしながら、数世代を経るに従って、本家と分家の関係は消えるようにうすくなる場合もみられる。この場合、カブ内の家と家との関係は、必ずしも、本家分家の関係を意識して結ばれているとは限らない。

次に、一つのカブを構成する家々はムラの中の近い地域に建てられている。櫟野ではカブ内であれば、だいたい同じ組に集まっている。

また、カブは墓地を共同に所有する。櫟野ではサンマイに埋葬するとき、その場所がカブごとに決まっている。ただし、寄せカブ(同姓家数が少ない家々がまとまって、一つのカブを構成するもの)の場合はサンマイに一定の埋葬の場所を持たない。それぞれのカブの埋葬場所の間に散在している。

山の神祭祀にも、カブが関係している。毎年1月6日に櫟野の全世帯の男性が集まり、前年に生まれた男児を山の神の前へつれてくる祭祀がある。この山の神は現在では櫟野全体の山の神であるが、例えば、大原カブ・九里カブ・山本カブ・島岡カブではカブごとに、山の神祭祀を行なっている。こうした事例から、本来はカブごとに山の神の祭祀を行なっていたとも考えられる。

カブのつきあいについて、正月、初盆、結婚式、葬式に際してはつきあいの義務がある。特に、葬式においてはカブのつきあいが最もよくあらわれている。香典帳に記載されたとおり、カブは「手伝いの部」に含まれる。葬式のとき、労力を提供し、葬列の役割の一つ（幡を持つこと）を果すことはカブとしての義務である。また、香典においても、カブは同一金額（5千円）の御仏前および供え物を供えた。

### 3 近隣関係

葬式において、組の人つまり隣保組の人々は葬式の前日から（5月2日）本葬まで（5月3日）、労力を提供した。葬儀委員長の役割をはじめ、葬具作り、祭壇の準備、墓穴掘りなどは下の組の隣保組の人々によって行なわれた。

なお、第1節で概観として述べたように、櫟野は三つの組に区分されている。組はさらに隣保組に分かれている。下の組には隣保組が三つある。第9隣保組・第10隣保組・第11隣保組である。徳田家は第11隣保組にあるため、葬式のとき最も多く労力を提供するのには第11隣保組であった。しかしながら、近接している第9隣保組・第10隣保組の人々も本葬の日に手伝いにきた。香典帳に記載されたとおりに、第11隣保組の人々は「手伝いの部」に位置づけられている。また、香典においても、カブと同じように5千円の御仏前および供え物を供えた。

このように、隣保組という地縁的な集団はムラ人の生活上の互助協力組織としての機能を持つことがわかる。隣保組は葬式において、多くの労力を提供するが、他の祝儀・病気見舞などにおいても、さまざまな役割を果す。したがって、隣保組は「遠いところよりも近いとなり」といわれるように、場合によっては親族以上のつきあいをする重要な社会組織である。

### 4 檀家関係



徳田平兵衛氏の葬式において・親族・同族・近隣以外に檀家寺もいろいろな役割を果たした。葬式は檀家と檀家寺とのつきあいの一つの機会である。

櫟野において、93世帯がすべて、中の組にある阿弥陀寺の檀家である。徳田平兵衛氏の葬式では、阿弥陀寺とかかわった行事が多くみられる。すなわち、枕経をはじめ、出棺、埋葬などの法事、初七日から四十九日の忌明けまでの供養、百ヶ日の供養、初盆の行事などにはすべて阿弥陀寺がかかわっている。（ただし、お通夜には阿弥陀寺の住職はあられず、櫟野寺の住職と御詠歌会が念仏と御詠歌をあげた）

また、天蓋・燈灯・幡など、野辺送りのときに使う葬具はすべて阿弥陀寺から借りたものであった。さらに、櫟野の人々の墓所（阿弥陀寺および上の組にある墓地）も阿弥陀寺に属している。したがって、阿弥陀寺は葬式の法要に重要な役割を果たすと同時に、葬列に使う葬具・墓所などとかかわっている。

ところで、阿弥陀寺と檀家との関係は、葬式以外に、寺院の年中行事、寺院の修理、墓の掃除などにおいてもみられる。

檀家は檀家寺の維持のため、協力援助を提供することが義務とされている。櫟野の場合、檀家として、各家が毎年4回阿弥陀寺に謝辞費を納める。

## む す び

ムラは、一定の家によって構成されているものである。家が互いに近接して存在し、周囲に田畑、山林が広がっていることにより、農林漁業を生産活動とする人々が地域的にまとまり、一つの社会組織になっている。

ムラにおいて、家々の生活上の協同関係および社会関係は多様な契機にあらわれる。例えば、農作業・建築・災害・年中行事・婚姻葬送儀礼などである。いいかえれば、ムラの協同関係は生産上の互助協力のみではなく、他の様々な生活場面・祝儀・不祝儀などの儀礼的場面における互助協力や

儀礼への参加にも見られる。

葬式はムラの事件であり、ムラの人全体が参加する儀礼であると同時に、葬式を契機にして、ムラの協同関係を確認する儀礼でもある。徳田平兵衛氏の葬式における役割に目を向けると、親族・同族・近隣・檀家という四つの関係とかかわる人々があらわれてくる。これらの人々は葬式に集まり、協同的活動を行なった。親族は葬式における主な役割を果たした。同族と組の人々は主要な労力を提供した。また檀家寺は葬式において重要な役割を果たし、死者は檀家寺の墓所に埋葬された。

しかし、ある家の葬式に対し、ムラの全世帯が参列するが、一定の条件によって役割を果たす者がムラ人の中から選ばれる。AはBの葬式において、諸過程の儀礼を行ない、Cは労力を提供するというそれぞれの役割を果たしたが、DはBの葬式において、協同的活動に参加しなかった。要するに、葬式にあらわれる協同関係はムラの社会関係に基づいて一定の条件によって、もたらされるのである。すなわち、その条件とは親族・同族・近隣・檀家関係である。そして、この四つの関係のカテゴリーの中に含められた人々がある個人の死という出来事を通じてまとまり、葬式を運営するわけである。

## 注

- (1) 筆者は福田アジオの述べたように、ムラという言葉を決定的に使う。  
「ムラ(村)」という言葉を使用する場合、大きく二つの意味に分かれている。一つは行政機構の単位としての、すなわち、地方自治体としての村であり、他の一つは人々が農山漁村地帯でまとまりを持って、生活している単位としてのムラである。したがって、政治的要素としての村と民俗的要素としてのムラという二つの意味が区別されている。」(福田1984年:465ページ参照)
- (2) 筆者は1985年4月に櫟野のフィールド・ワークの期間中、徳田平兵衛氏に出会った。故徳田平兵衛氏は明治33年(1900)8月23日生まれ、昭和60年(1985)5月1日午後、死亡した。享年85歳であった。
- (3) 櫟野では墓地が二つに分かれている。一つは阿弥陀寺内に、他の一つは上の組にある。上の組にある墓地は昔、そこに、安国寺あんこくじという寺院が位置され、安国

寺の墓地であったが、後、安国寺は阿弥陀寺と合併され、その墓地も阿弥陀寺に属するようになった。下組の人・中組の人は阿弥陀寺内にある墓、上の組の人は上の組にある墓地を持っている。

- (4) 機野で使っている「親族」とはフォーク・タームである。人類学で使う親族体系の意味ではない。
- (5) カブとは同族集団の名称である。同族とは専門用語であって、各地でイッケ、イットウ、カブ、マキ、ジルイ、マツイなどさまざまな名称で呼ばれている。カブという同族集団は家と家が結合した家連合からなるものである。
- (6) 人類学の用語にならって、親族関係上の地位を表記するのに、FA (父)、Mo (母)、So (息子)、DA (娘)、Br (男の兄弟)、Si (女の兄弟)、Hu (夫)、Wi (妻) などの記号を用いる。本稿では、これらの用語は原則として、記号で示すことにする。
- (7) 血族あるいは血縁家族とは夫婦家族と対照される家族組織の一型。家族を構成する主要な条件は夫婦の婚姻関係と親子・兄弟・姉妹などの血縁関係であるが、血縁家族は親子・兄弟姉妹を重視して組織された。」(濱島編1977年：92ページ参照)

## 参 考 文 献

- 有賀喜左衛門 「親族と同族」(『日本民俗学講座5』)、朝倉書店、1976年。
- 石川榮吉他編 『生と死の人類学』、講談社、1985年。
- 井之口章次 『日本の葬式』、筑摩書房、1981年。
- 蒲生正男 「親族」(『日本民俗学大系3』) 平凡社、1958年。
- 濱島朗編 『社会学小辞典』増補版、有斐閣、1977年。
- 坪井洋文 「ムラ社会と通過儀礼」(『日本民俗文化大系8 村と村人』)、小学館、1984年。
- 中根千枝 『家族の構造』、東京大学出版会、1983年。
- 原 忠彦・末成道男・清水昭俊 『仲間』、弘文堂、1979年。
- 藤井正雄 「寺院と檀家」(『日本民俗学講座3』)、朝倉書店、1976年。
- 福田アジオ 「民俗の母体としてのムラ」(『日本民俗文化大系8 村と村人』)、小学館、1984年。

付記。本稿は、1986年1月、大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部をまとめたものである。

(大学院後期課程学生)